

頼まれごととは試されごと

『国語の窓』というものを出し始めました。第1号のタイトルは、「国語の先生になる」です。今まで、「頼まれごととは試されごと」の如く、オーダーが入れば断ることもなく教員生活を送ってきました。その結果、教育書の前稿や、実践発表、研究論文などが累積されていきました。

それらを、一度整理してみようと考えました。ところが、月日だけが過ぎ去っていきました。そろそろ、とりかかろうと思いましたが、一向に進みません。さて、どうするか、考えました。やめてしまうという選択肢もありました。しかし、そうはしたくありません。あるとき、思いつきました。毎日、『校長室だより～燦燦～』をホームページにアップしています。毎日、原稿をまとめることには慣れているし、習慣化しています。よし、この方法でいこう。毎日、A4判の前稿を出す形なら、できるかもしれません。

というわけで、さほどの計画性もなく、『国語の窓』という形で、毎日、原稿をホームページにアップしていきました。この作業は、約1年で終了しました。原稿をつくることで、自分の国語の授業を振り返ることができました。

表現できる生徒になってほしい

いったい自分は、どんな国語の授業をしたいのか。どんな生徒になってほしいのか。通常は、この2つが先にあるはずですが、私の場合は、そうではなかったように思います。そのとき、そのときで、どうにか授業を改善したい。何とか授業を活性化したいという思いから、授業のことを考えてきました。

それでも、自分の国語の授業には、幹のようなものがあることには気づいていました。それは、表現できる生徒、自分の思いや考えを表現できる人間になってほしいという願いです。自分の言葉で、書いたり話したりできる人になってほしいという思いです。書くことは考えることであり、もちろん重要です。それと同時に、話したり、話し合ったりすることができるようになってほしいと考えていました。これは、日本の子どもの、日本人の弱点でもあります。

読解力と表現力は両輪

書くこと、話すこと、話し合うことに力を入れてきました。表現するには、考えをもたなければなりません。考えをもつためには、読み解く力も必要です。すなわち、読解力と表現力は両輪であり、どちらも大切なものです。バランスの問題であるという結論に至りました。

この結論は、ごくごく当たり前の話です。私の場合は、ここにたどり着くまでに、ずいぶんと長い時間を要しました。その道のりは、若い国語の先生方にとって、何かしらの参考になるのではないかと考えました。灯台や羅針盤のようなものになればという思いです。うまくいった実践ならば、世の中に書籍などの形で、よく見ることができます。しかし、うまくいかなかったことも含めて知ってもらったほうが参考になるのではないかと考えました。 (次号に続く)